

# 目次

はじめに	9
序章 敗者文学としての『伊勢物語』	13
一 はじめに	13
二 〈業平〉と〈海人〉	14
三 『伊勢物語』 一一段の場合	17
四 『伊勢物語』の方法	18
第一部 『伊勢物語』の方法	21
第一章 「須磨の海人の塩焼く煙」考——『伊勢物語』 一一段の和歌の位相	23
一 はじめに	23
二 『伊勢物語』の再評価	24
三 「興」的発想としての「たとへ歌」	25

四	「須磨の海人の塩焼く煙」和歌の基層	26
五	方法としての配列	32
六	「海人の塩焼く煙」へのまなざし	36
七	重層する海人の思い	38
第二章 響振する詞章——『伊勢物語』七三段、七四段を中心に		
一	はじめに	43
二	『伊勢物語』七三段、七四段の周縁	44
三	七三段和歌の位相	46
四	『伊勢物語』の〈作り物語〉性	47
五	〈喩〉としての月のうちの桂	49
六	連想を呼ぶ言葉「いわねふみ重なる山」	50
七	響振する詞章	54
第三章 恋歌になった哀傷歌——『伊勢物語』一〇九段、一一九段の場合		
一	はじめに	59
二	『古今和歌集』紀望行の和歌	60

第四章

三 『伊勢物語』に対する不審	61
四 哀傷歌と恋歌	63
五 『躬恒集』哀傷の歌	64
六 和歌内の「いづれ」と地の文	65
七 『伊勢物語』一一九段の場合	68
八 『伊勢物語』の作為性	72
創出される氏族の興亡——『伊勢物語』八〇段と九七段	79
一 はじめに	79
二 『伊勢物語』八〇段、混同される注釈	79
三 年内立春の歌	82
四 しひてをりつる	83
五 『伊勢物語』八〇段	86
六 『伊勢物語』九七段、混同される注釈	88
七 行平歌から業平歌へ	90
八 和歌の生成過程	92

第五章 方法としての〈物ことば〉……………103

一 はじめに……………103

二 歌物語における〈物〉の授受……………104

三 『伊勢物語』三段の場合……………109

四 『伊勢物語』一八段の場合……………112

五 『伊勢物語』二〇段の場合……………116

六 〈物ことば〉から「歌ことば」へ……………119

七 〈物ことば〉の可能性……………122

第六章 かち人の渡れど濡れぬえにしあれば——『伊勢物語』六九段の方法……………125

一 はじめに……………125

二 『伊勢物語』六九段の言葉遊び……………126

三 本末の応酬の問題点……………130

四 中世歌人たちによる『伊勢物語』享受……………133

五 六九段と漢籍引用……………134

第二部 『伊勢物語』の引用と享受……………141

第一章 しのぶの乱れ——『伊勢物語』引用と藤壺物語

- 一 はじめに……………143
- 二 『狭衣物語』における「忍ぶ振摺」……………145
- 三 『源氏物語』における「忍ぶの乱れ」……………147
- 四 『伊勢物語』六五段と『源氏物語』……………150

第二章 引用のテクスチュア——『源氏物語』早蕨巻・手習巻における『伊勢物語』取り

- 一 はじめに……………157
- 二 『伊勢物語』四段と『源氏物語』早蕨巻……………157
- 三 梅・橘の香と昔の人……………160
- 四 『伊勢物語』四段と『源氏物語』手習巻……………161
- 五 〈憂し〉の世界の創造……………163

第三章 引用のテクスチュア——『源氏物語』浮舟巻・蜻蛉巻における〈憂し〉の物語

- 一 はじめに……………167
- 二 浮舟巻における小町歌「さそふ水あらば」……………167

三	『古今和歌集』の小町評	168
四	浮舟と漢籍引用	169
五	悩める浮舟	172
六	「橘」の香と不貞	174
七	浮舟の生成と〈憂し〉の物語	175
第四章		
	「いとどしく過ぎゆく方」の系譜——『伊勢物語』七段から『源氏物語』へ	183
一	はじめに	183
二	『源氏物語』須磨卷——「波」による重層表現	184
三	『源氏物語』須磨卷における引歌表現	186
四	『源氏物語』玉鬘卷——女どもの西国下り	188
五	「いとどしく過ぎゆく方」の系譜	193
第五章		
	『伊勢物語』とその享受——歌論・歌学書・歌合	199
一	はじめに	199
二	『伊勢物語』に対する評価	200
三	和歌詠作の実際——『六百番歌合』の場合	202

四 中世歌人の『伊勢物語』享受—寂蓮の場合……………214

おわりに……………221

\*初出一覧……………229

索引……………001  
①

## 凡例

- 一 『万葉集』『伊勢物語』『大和物語』『源氏物語』の本文の引用は、『新編日本古典文学全集』による。それ以外の本文は、通行の本文によるが、読点を句点にしたり、漢字を平仮名にするなど、本文の内容に支障をきたさない程度本文を改めている場合もある。
- 一 私家集の引用は『私家集大成』によるが、その他の和歌の引用は、断りのない限り、『新編国歌大観』による。
- 一 写本、影印本を引用する際、翻刻にあたっては、便宜上、句読点等を施した。
- 一 引用本文の傍線等は、断りのない限り、私に付した。

## はじめに

『伊勢物語』の研究の歴史は長く、伝統的な和歌の道に則った注釈作業や伝授が行われてきた。その一方で、個々の読みによる注釈の説話化や謎解きを含んだ意匠など享受の様相は多岐に亘っており、『伊勢物語』を一個の作品として統一的に捉えることはなかなか困難な問題のように思われる。

従来の『伊勢物語』研究を概観しておくと、成立論では内部徴証と外的資料の新しい解釈から副次的な成立過程を考えようとする段階にきている。かつて片桐洋一の提唱した、所謂三段階成立論が話題を呼び、賛否両論が展開された。また、「狩使本」等の存在を考えれば、書名とそれぞれの作品の成立との関係も無視できない問題である。作者論では、業平自作、「伊勢の御」編纂説、在原一門説、業平説、紀貫之説などがある。しかし、いずれも決定的な決め手を欠いている。『伊勢物語』の成立が一回的なものでない以上、複数の手によるものと推察される。サロンのな場を考える論説もあるが、推測の域を出ない。主題論では、初段に掲示される「みやび」など様々なテーマが与えられてきた。他方、「反みやび」の章段は低い評価を受ける傾向がある。概ねそれらは、主人公（業平）の言動による（心）の有り様に向けられ、ある種観念的な言説によって把握されてきた。このように『伊勢物語』研究はある一定の成果を上げてきている。しかしながら、近年の『伊勢物語』研究は、物語の読みや本質から離れ、背景や伝承、芸能、美術作品の意匠など周辺の方向に移行しつつある。

伝本整理や本文研究、注釈書の翻刻や解題作業など、資料を収集し広く公開していくことは文学研究においては基礎的な研究であり重要であるが、『伊勢物語』研究の場合は既にその段階を越えつつあり、方法論に重点を

移行していく必要がある。目指すべきは、世界に向けて、日本文学の特質を明らかにしていくことである。日本文学を代表する作品である『伊勢物語』の特質とは何なのか、歌と物語の相関関係、歌から物語が生成していく過程を追究し、歌集中の和歌との差異や関係性に迫っていくことが『伊勢物語』研究にとって肝要であると考えられる。

『伊勢物語』は有名な作品であるため、世界にも日本文学の代表的作品として広く浸透しているが、粗筋の紹介に留まり、『伊勢物語』の方法Ⅱ特質が明らかにされているとは言えない。『伊勢物語』の英語版の翻訳書を見ても「掛詞」などが字面にあわせて訳してあるだけでは和語が二義性を有することの説明にもならないし、ましてや、日本文学特有の省略による言葉の多義性などは伝えることができず、『伊勢物語』、日本文学の面白さは、まだ世界に向けて提示されているとは思われない。その日本文学作品に特徴的に見られる「多義性」などの特質を明らかにし、国内はもちろん世界に向けて発信していかなければならない。

また、『伊勢物語』は難解さゆえにか、短小な段は、他の歌集等と同様に扱われ、「物語」として認識されていない。確かに、歌物語に分類される『伊勢物語』は、後世、和歌を学ぶ人のための必読書であったように、和歌優位の作品である。しかし、それと同時に和歌から物語が作り上げられていく過程も重要である。そこにこそ『伊勢物語』の特質があると考えらるからである。その特質を解明するためには、『伊勢物語』と共通の和歌を持つ『古今和歌集』等の歌集作品との比較研究が有効である。従来の研究では、『古今和歌集』などの歌集と『伊勢物語』の和歌が重出した場合、同様の和歌として解釈されてきた。それらの違いを明確にしようとした点に本研究の意義がある。歌中の語の多義性を和歌の修辭的な方法として捉えるのではなく、『伊勢物語』の物語化の特質と

して論じる。

本書では、『伊勢物語』と他作品との関係性を視野に入れながら、『伊勢物語』における和歌脱構築の方法とその享受の様相について、多角的に論じていきたい。

第一部「『伊勢物語』の方法」では、『伊勢物語』古注釈書等を視野に入れつつ、『伊勢物語』の方法に迫り、新たな読みを提示する。古注釈書等を取り上げた理由は、それらの〈読み〉は、その時代性を反映しており、『伊勢物語』の解釈の歴史や文学史を捉える上でも重要であると考えられるからである。第一章「須磨の海人の塩焼く煙」考——『伊勢物語』一一二段の和歌の位相」では、『伊勢物語』一一二段所載の和歌が『古今和歌集』（仮名序および巻一四、恋歌四、七〇八）やその他の作品に収められている場合との差異や和歌の内実を明らかにしていく。第二章「響振する詞章——『伊勢物語』七三段、七四段を中心に」では、『伊勢物語』の所謂斎宮章段の配列に着目し、七三段と七四段の詞章が映発しあい、物語を作り上げていく点に迫る。第三章「恋歌になった哀傷歌——『伊勢物語』一〇九段、一一九段の場合」および、第四章「創出される氏族の興亡——『伊勢物語』八〇段と九七段」では、『古今和歌集』と『伊勢物語』に重載される和歌の差異について論じる。第五章「方法としての〈物ことば〉」では、古典作品に多く見られる〈物〉の授受に和歌の贈答を伴う例を取り上げ、『伊勢物語』における贈与される〈物〉の性質の分類を試みる。そして、そこに込められたメッセージの多様性を提示することで、意識的に選択された〈物〉の意味について考察する。第六章「かち人の渡れど濡れぬえにしあれば——『伊勢物語』六九段の方法」では、多種多様な言葉あそびを指摘するとともに、六九段の漢籍引用の方法とその意味を明らかにしていく。

第二部「『伊勢物語』の引用と享受」では、『源氏物語』の『伊勢物語』引用について、物語の構造論的に両者の相関関係について論じるとともに、歌論・歌学書・歌合および中世の歌人による『伊勢物語』の享受の様相を明らかにする。第一章「しのぶの乱れ——『伊勢物語』引用と藤壺物語」では、光源氏と藤壺の密通事件のキーワードとされている「しのぶの乱れ」という語を取り上げ、なぜ二人の密通が「しのぶの乱れ」と表現されなければならなかったのか、『伊勢物語』初段、六五段との引用関係を詳細に見ていくことで、『源氏物語』の人物造型に『伊勢物語』が深く関わっているということを論じる。第二章「引用のテクスチュア——『源氏物語』早蕨巻・手習巻における『伊勢物語』取り」では、早蕨巻、手習巻の『伊勢物語』引用箇所を取り上げ、『伊勢物語』の物語世界が様々な形で『源氏物語』内部に展開していく様相を論じる。第三章「引用のテクスチュア——『源氏物語』浮舟巻・蜻蛉巻における〈憂し〉の物語」では、浮舟巻・蜻蛉巻の〈小町〉引用により〈憂し〉の物語が生成していく様相について論じる。第四章「いとどしく過ぎゆく方」の系譜——『伊勢物語』七段から『源氏物語』へ」では、須磨巻と玉鬘巻における『伊勢物語』七段の引歌表現に着目し、『源氏物語』が『伊勢物語』の東下りをどのように相対化していくのか、その意味と方法について考察する。第五章「『伊勢物語』とその享受——歌論・歌学書・歌合」では、一二世紀末から一三世紀初期にかけての歌論・歌学書・歌合の判詞などから、当時『伊勢物語』がどのような評価を受け、どのように捉えられていたのかということ、歌人の流派や物語享受のあり方を視野に入れながら分析し考察を加える。

## 序章 敗者文学としての『伊勢物語』

### 一 はじめに

次に掲出したのは、『源氏物語』絵合巻で『竹取』『うつほ』に続き、『伊勢物語』と『正三位』が合わせられ、優劣が競われる場面である。

次に伊勢物語に正三位を合わせて、また定めやらず。これも右はおもしろくにぎははしく、内裏わたりよりうちはじめ、近き世のありさまを描きたるは、をかしう見どころまさる。平内侍、

「伊勢の海の深き心をたどらずてふりにし跡と波や消つべき」

世の常のあだことの、ひきつくるひ飾れるにおされて、業平が名をや朽すべき」と争ひかねたり。右の典侍、雲の上に思ひのほれる心には千尋の底もはるかにぞ見る

「兵衛の大君の心高さはげに棄てがたけれど、在五中将の名をばえ朽さじ」とのたまはせて、宮、

みるめこそうらふらぬらめ年へにし伊勢をの海人の名をや沈めむ

〔総合〕②三八二

右方の当世の描きぶりが「をかしう」見所が勝っている。左方の平内侍も反論しかねている様子で、あわや『伊勢物語』の負けかと思われたが、藤壺の助言により『伊勢物語』の勝ちとなる。その際、「業平が名」Ⅱ「在

五中将の名」。「伊勢をの海人の名」と記されるように、「業平」は「海人」に比されるのであった。その「海人」を『伊勢物語』の「伊勢」から導き出された、と単純に考えるべきではなからう。「業平」が「海人」に比されることは、『源氏物語』から見て『伊勢物語』の業平が、何らかの点で〈海人〉に準えられる要素を持っていたことを意味するのではあるまいか。それは『伊勢物語』東下りの男の流浪にも代表される、敗北者的な〈業平〉の擬似象徴である。そこにこそ「伊勢の海のかき〈心〉」もあるように思う（第一部第一章参照）。

## 二 〈業平〉と〈海人〉

『伊勢物語』中に「海人」やそれに関わる語はどの程度出現するのだろうか。また、「海人」はどのように描かれているのであろうか。次に「海人」と関連のある段を掲げる。

二五段「みるめなきわが身を浦と知らねばや離れなで海人の足たゆく来る」

五七段「恋わびぬ海人の刈る藻に宿るてふわれから身をもくだきつるかな」

六五段「海人の刈る藻に住む虫のわれからと音をこそ泣かめ世をば恨みじ」

七〇段「みるめ刈るかたやいづこそ棹さしてわれに教へよ海人のつり舟」

七五段「袖濡れて海人の刈りほすわたつうみのみるをあふにてやまむとやする」

八七段「海人の漁火多く見ゆるに」「晴るる夜の星か河辺の蛍かもわが住む方の海人のたく火か」

九六段「天（海人）の逆手」

一〇四段「世をうみのあまとし人を見るからにめくはせよとも頼まるるかな」

一二二段「須磨の海人の塩焼く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり」  
また、海沿いを行く男、海に関わる地名や和歌などが読み込まれる段は以下の通りである。

七段「伊勢、尾張のあはひの海づらを行くに」

二六段「思ほえず袖にみなとのさわぐかなもろこし船のよりしばかりに」

三三段「津の国、菟原の郡に：」「あしべより満ちくるしほのいやましに君に心を思ひますかな」

六一一段「名にしおはばあだにぞあるべきたはれ島浪のぬれぎぬ着るといふなり」

六六段「難波津を今朝こそみつの浦ごとにこれやこの世をうみ渡る舟」

六八段「住吉の郡、住吉の里、住吉の浜を行くに：」

「雁鳴きて菊の花咲く秋はあれど春の海辺にすみよしの浜」

七二段「大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる浪かな」

八一一段「塩竈にいつか来にけむ朝なぎにつりする舟はここに寄らなむ」

八七段「海のほとりに遊びありきて」「浮き海松」

九二段「蘆辺こぐ棚なし小舟いくそたび行きかへるらむ知る人もなみ」

一一五段「おきのあて、都島といふ所にて」

一一六段「浪間より見ゆる小島のはまびさし久しくなりぬ君にあひ見で」

一一七段「住吉に行幸したまひけり」

このように抜き出してみると、『伊勢物語』の男は海辺を度々逍遥しており、そのことから「海人」と結びつ